

1/27
毎日

満腹なら頑張れる

「今年生活費がどうかよりも大事。しんていまで食べたい」。大阪府豊中市で飲食店を経営する女性が年末年始、新型コロナウイルスの影響で生活が困難している人のための「大人食堂」を開いている。路上生活者への炊き出しやシングルマザー支援にも携わる経験から、「仕事を失ったり収入が減ったりした苦境の責任を、全部自分で負わなくては」と来店を呼びかける。雇用の悪化で例年になく厳しい冬だが、生活再建へ歩み出そうとする人の支えになれば。「のれんをくぐる」一人一人に、店名も「おかえり」の言葉をかける。

女性は上野敏子さん（52）。2019年9月から豊中市内西町の「おはん処 おかえり」を、母の上司日美子さんと運営している。忘れられない思い出がある。路上生活者を支援できたのは、大阪市の繁華街・梅田で弁当の無料配布を始めた昨年夏前。JR大阪駅の高架下で寝起きしていた70代の男性と顔見知りになった。最初は無言で受け取っていた男性が、しばらく通い続けた上野さんの顔を覚えてくれた。「おなかがいっぱいになれば、とりあえず明日を頑張ろうという気になれる」。上野さんはその後大阪市内の公園で仲間と炊き出しを実施。自宅で煮込んだカレーなどを配り、「生ませ

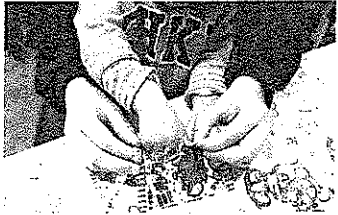
て」も「おかえり」の言葉をかける。その思いが決意を変えたのが、18年6月に起きた大阪北部地震だった。その頃、地元にも携わっていた上野さん。地震でスーパーが閉店し、子ども食糧に困る子を一人で育てる女性から相談された。「スーパーで見切り品を買って生活をしてきた。食料の備蓄がなくなると、明日から食べるものにも困る」。この言葉をき

年末年始も「大人食堂」 大阪・豊中

かた、上野さんはシングルマザーの生活相談に乗る「シンママ援団とてなか」の活動も開始。その趣意に賛同したのが、「おはん処 おかえり」だ。家計に余裕がない人も買やすいよう、多くの惣菜を100円で店頭に入っている。だが、新型コロナウイルスの影響が収まらぬ中、生活への影響が広がっているのを目にしたと感じるようになった。

店を利用する20代のシングルマザーは8月、持病のぜんそくが悪化。幼い子供3人を育てたため週5日宅配便の仕分けのパートをしながら、呼吸をするのも難しくなることがあり、医者に行くよう強く勧められた。勤務日を減らせな

かとう司に頼んだが応じてもらえず、仕事を続けるのを諦めざるを得なかった。善えはなへ、店先に置かれていたシングルマザー支援のチラシを目にして上野さんに現状を訴えた。携帯電話代が払えず、発熱した子供を診てもらう病院を探し回ったことも。上野さんの付き添いで1月に生活保護を申請した際、全財産

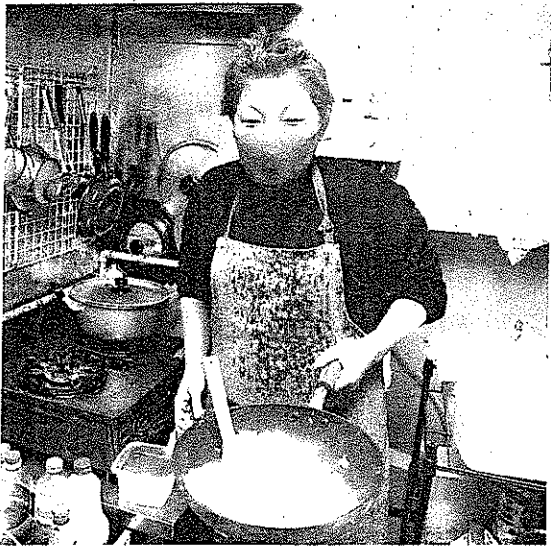


は財布の中の8万円だった。

「先が見通せず、家には貯布の中が8万円だった。ただで苦しんで涙が止まらない日が続いた。そんな時に悩みを打ち明けられる場所があって救われた」。ぜんそくが治れば再び仕事に就きたいという女性に、上野さんが笑顔で語りかけた。「一人でよく頑張ってきた。今は目元がいいから」

いま、上野さんが気にするのは年末年始だ。新型コロナウイルスの「第3波」が続く中で役所の相談窓口が休みになる。そこで企画されたのが、食事と生活相談の場を兼ねる「大人食堂」。21日から始めており、1月5日までの午後6時、訪れた人に500円で定食を提供し、生活再建に向けた相談にも乗る。事前連絡がなくても来店でも対応。同伴する子供は無料だ。お金のない人には、店の普段の客に費用を肩代わりしてもらったクーポン「お福分け券」を用意しており、無料で食べさせてもらう。アルバイトが減って暮らしに困っている10代の学生なども受け入れる。

少しでも前向きな気分になってもいいはずと、元日には雑煮を振る舞うとしても



「おはん処 おかえり」で入浴の準備をしている上野敏子さんの生活相談している様子。子供はお小遣いで買ってもらった「おはん処」の惣菜100円が販売されている。相談できる場所がなくなって困った上野さんは、母の手を借り、突進を断った。1月21日、大阪府豊中市内西町の22日

コロナ禍 シングルマザーら困窮者守る

考えている。「人生でつまずいてしまつてはあつて、自分を責める必要はない。もう一回、頑張るための土台の「こ」に食堂がなれたらいい。気軽に訪れて、まはちなかなを満たして」と上野さんは呼びかける。カンパや食材の寄付も募っている問い合わせは「おはん処 おかえり」のフェイスブックか、上野さん（080-50010-1006）。

【村松洋、写真も】